

く恐あるも、而かも當時人心の情偽に觸るゝ所あ
機を相て、更に秦邊紀略中に包有せる他の西夷史
料を研究せば、再び正に同好の士に就かんとす。

京 都 南 蠻 寺 興 廢 考

文學博士 新 村 出

一
南蠻寺といふ稱呼は一般に吉利支丹寺院の意味
でも用ゐられてゐるが、主として信長の保護によ
つて建立され秀吉の禁教の結果破壊された京都の
吉利支丹大寺院の特稱になつてゐる。いづれにせ
よ徳川時代中期このかたの追稱であつて、寛永以
前には見かけぬ所である。天文二十一年大内氏か
ら建立の許可を得たとある山口の大道寺、永祿七
年平戸に創建された天門寺などの寺號は、西土の
史にも載つて疑はれぬが、本邦の稗史野乘に傳は
つてゐる永祿寺とか大成寺とかいふ名は、根據の
なきもので、後人が隨意に造つた稱呼である。中
にも大成寺とあるは「大成寺」と古い本にあつた
のを、送假名が除かれて寺號のやうに誤解された
のである。この筆法は古い記録にはさらに多いの
で、例へば當代記に「伴天連師匠寺」だの「西京寺」
だのと見えてゐるもの、一は伴天連師匠即ち宣教
師の住寺の意味、他は西の京の寺といふ意に外な
らぬ。天主寺とあるのなどは天主の寺の汎稱であ
つて、亦特稱ではない。要するに布教當時にあつ
ては、信徒の間には、宣教師の定めた洋名の寺號
が通用したに相違ないが、一般世間には傳はらず

又他から特別に日本風の名號を賦與しなかつたらしい。但し日本西教徒の根本地であつた長崎にはサン・ジョアン(San Juan)タウドノサント(トドス・ロス・サントス Todos Los Santos の訛)等の歐名が残つてゐるが、京都のノツサ・セニョーラ寺(Nossa Senhora) & サン・ミゲール寺(San Miguel)は本邦の舊記には全く傳はらない。

さて我國の舊記には前述の如く單に寺、寺院、とあるが然らずんば吉利支丹寺とあるのが普通であるが、時には拉丁語の ecclesia 或は葡萄牙語の igreja がある。「るげれんじや」「いかりんじや」と呼び又は之を日本化して「るかりん寺」「惠化連舎」などの文字を用ゐたこともある。いづれにしても彼れの教會堂をば寺、寺院と呼做し、又原名を用ゐつゝも日本の寺と同様に見立てゝゐたことは普通である。而して南蠻寺の名が、特稱としても汎稱としても共に當時のものではないこと丈は

確かに思ふ。然し姑くこゝでは天正年間に興廢した所謂南蠻寺なるものを始め、慶長年間に建立毀焼された耶蘇教會堂や南蠻寺と呼び、その他永祿中なり文祿中なりに一興一廢のあつた教會堂を始め、各時代の禮拜堂のことにも及ぶことである。

二

京都に宣教師が定住して先づ禮拜堂を設け、尋いで教會堂を建てるやうになつたのは、一五六〇年、我が永祿三年のことであつて、この最初の師父はガスバル・ヴィレラ(Gu. par Villa)であつた。その入洛は右の前年の末であるから、嘗て瀬踏みに來て直に引回したシャヴィエル聖人の入洛した一五五一年の天文二十年からは九年後である。この間に平戸山口府内博多などには寺院の建立もあつたのである。かくて京都に設立された最初の吉利支丹寺は翌年永祿四年に一時廢絶し、更にその翌年に復興され、爾來三年間打續き、永祿七八年

の交には新にルイス・ソロイス Luis Flores も來任し頗る盛況を呈し全國の耶寺中で最も繁榮であつたと報せられる。時めいた三好松永二氏が同寺に詣つたこのことで宣教師が悦んだのも、ゲイレラとフロイスとが將軍義輝に謁するため仰々しげな行列で練つていつたのも、その歳その寺であつた然るに好事魔多く二氏が將軍殺戮にひきつゝいて京都の兵亂となり、永祿八年夏兩師父はその徒共に堺に逃れ、寺院は再び廢絶に歸し、其後約四箇年、京都には寺も無く信徒も離散した儘になつて居た。前後通じて五六年間存した三好氏時代の寺院については特に記する程の事もない。

これからは信長時代である。永祿十二年春信長が再度の入京後、二條城の起工となり、和田惟政によつて堺から招致された師父ルイス・フロイスが城の工事中信長に謁見を得、茲に始めて信長の信用と保護を受ける端緒を得た。日乗上人との間に

宗論の戦はされたのも同じ時の事で、抜目なき宣教師が京都に一寺建立の爲め適當の地所の下附を請うたのも、その時の事であつた。バルトリの日本布教史にドトリナ・ヴェルダデーラ寺(眞教寺といふ義、Dotrina Verdader.)とあるのはその寺の名である。この寺は元龜年中を経て天正元年四月頃まで約四ケ年存続し、その間、オルガンチーノ・ニエツキOratio Gracchiが元龜二年に當る一五七一年の初入洛して先住のルイス・フロイスを輔けて布教に努め、尋いで副巡察カブラルが上京して將軍義昭に謁した様な事が起つた。このルイスは南蠻寺興廢記などに見ゆるヤライスであり、オルガンチーノは同記等に所謂ウルガンに當る。

さて天正元年信長の京都燒拂の時には、右の寺院は全く類焼しないまでも、殆ど廢類したには違なかつた。フロイスは亂前に豫め寺の道具類を取片附けて丹波の内藤如安のもとに隠し、自らも洛

外の村に難を避けた。亂後は寺院新築の必要が愈痛切に感せられた。オルガンチーノは來任以來舊き建物に代るべき新寺の建立に盡瘁し、遂に一五七六年八月十五日、即ち天正四年七月十一日を以て落成奉獻の式を擧げるに至つた始末などは、バルトリの日本布教史に見え、既に村上直次郎氏も「安土桃山時代の基督教」(安土桃山時代史論)中に紹介してをられる通りである。その位置は西史には不明であるが、その寺は本邦の舊記野乘に見ゆる所謂南蠻寺に外ならぬと信ずる。但しそれらの書物に載つてゐる記事の一々は直に採用するわけにはゆかぬ。南蠻寺興廢記には建立の時代を永祿とし、位置を四條坊門としてあるが、時代は全く誤つてゐることは明かであるが、位置に至つては尙攻究の餘地があると思ふ。

建立の翌年なる天正五年に於てオルガンチーノの教下にある南蠻寺全盛の模様はクラッセの日本

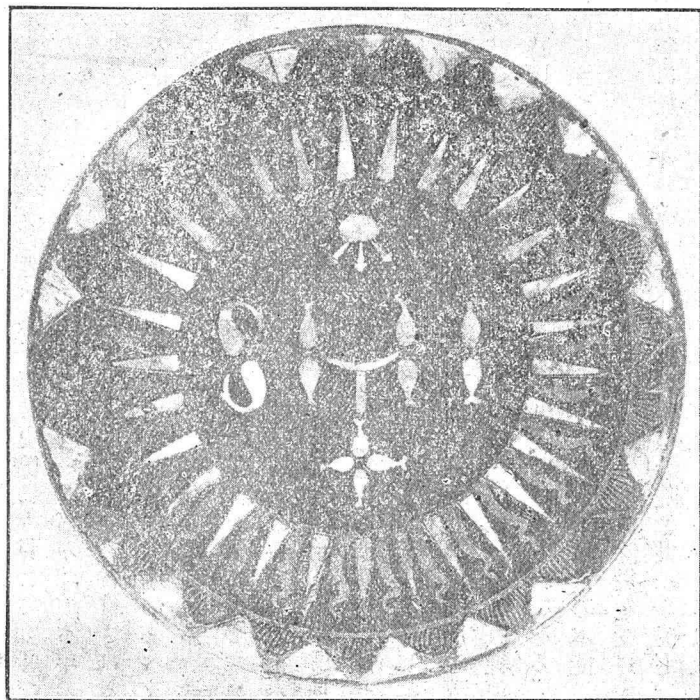
西教史等にも見ゆる如くで、又今日妙心寺の春光院に遺る古鐘の銘が本年の西紀一五七七となつてゐると相俟つて首肯される。宣教師の報告書や布教史の記載は數字のまゝ文章の通りには信用出来ぬが、割引すれば大躰の景況は察せられる。爾來信長の保護の下にあつた京畿地方の基督教は、その最盛期であつて、天正六年八年及九年に於ける信長對耶教の始末は、信長記にも散見する所であるが、直接に南蠻寺に關せざるが故に茲には省くことにする。天正九年には有名なワリニヤーニが京都を巡視し、修業所セミナリヤを安土に設けたやうな事があつて、京畿の布教は絶頂に達し、南蠻寺の盛觀は史上に特筆されてをる。

翌天正十年六月の本能寺事變の際には、京都の南蠻寺は幸に餘災を受けずに濟んだが、安土の修業所は寺院と共に全滅し、彼所の生徒どもは高槻京都、ひきつゞいては大阪に移された、これから

は秀吉時代であつて
基督教の繁榮も一時
大阪に移つた。

三

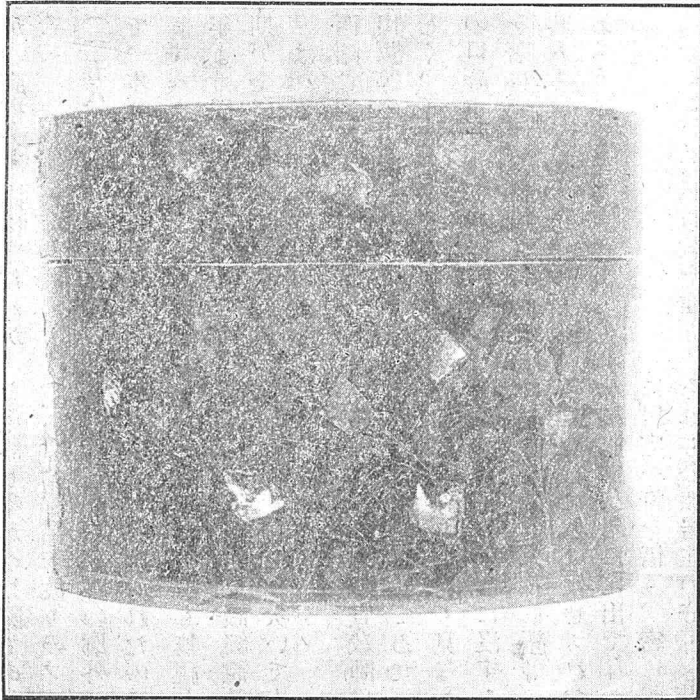
天正十一年の終よ
り大阪築城が始まり
程なく吉利支丹寺の
建立が高山友祥の盡
力によつて成り、翌
年には小西行長や小
寺孝高(黒田如水)が
受洗したやうな景氣
であつた。こゝには
例のオルガンチーノ
も來てゐたが、彼よ
りも寧ろグレゴリー
ヨ・テ・セスペデスの
regorio de Cespedes



が主な任務を負ひ活
動してゐた。南蠻寺
興廢記などに所謂ケ
リコリに當る宣教師
である。彼は大阪に
置かれた修業所（ミナトカ）を主
宰して、天正十三年
頃には秀吉をもこゝ
に迎へたこともあつ
た。巡察師ガスパル
・コイリヨ(Caplan Co
llo)が來つて大阪城
裡に謁見したのはそ
の翌年であつた。か
くて信長没後の京都
の南蠻寺は勢を大阪
に奪はれざるを得な

かつた。

天正十五年秀吉の西征中、留守の大阪には細川忠興夫人が前記のケリコリ（ダレゴリツヨ）に就いて洗禮を受けた様な事があつた代りに、博多では六月十九日（西紀一五八七年七月二十五日）禁教令を發して宣教師の日本退去を命じた様な事件が起つた。島津氏征伐より凱陣の歸途の事である。七月十四日大阪に凱旋の



後、數ヶ月を経て、多分翌年の初めあたりでもあらうが、秀吉は事に困りて京畿地方の教會堂及禮拜堂二十二ヶ所の破壊を命じた。原因は西史の記るすが如く果して師父等退去延期の出願を赫怒したが爲か、或は他に何等かの直接原因があつたのか不明である。興廢記等に見ゆる様な淺薄な理由ではなく、根本はやはり禁教令の精神から當然

生じた結果には違ないが、直接の源因は未だわからぬ。

とにかく天正十六年(一五八八)の初頃に京都の南蠻寺は破壊されたので、本邦の野乘に天正十三年とあるのは確に誤と断すべきである。されば京の所謂南蠻寺は天正四年より同十六年まで十二年餘り存立し、その前半期が全盛であつて、後半期は衰微しつゝあつたと思はれる。然し破壊以後この生徒や住侶ごもは西國に逃れ下り、天草の學校に於て教育翻譯編纂出版等の事業を助けて成績を擧げたこともあるらしく、予輩の推測によれば平家物語及伊曾保物語の口譯本を編したハビアン、一たびは妙貞問答書を著はし、又翻つては破提字子を撰したハビアン其人も、元來天正年中京の南蠻寺に居つた住侶であらうと思ふ。

四

秀吉が禁教令を弛めはしても、公然布教や建寺

を免許しなかつた際であるにも拘らず、文祿三年(二五九四)呂宋渡りのフランシスコ派宣教師等は秀吉に乞ひて京都の廓外に於て住宅用の一地を前田玄以より與へられたのに乘じ、説教集會の禁止を令せられたのをも無視して、そこに教會堂(ゴザウ)と僧(クワ)院(コウイン)と修道院を建て讀經説法を始めるやうな大膽な振舞を敢てした。次いで大阪にも修道院を建てたやうな始末である。

耶蘇會派の方の宣教師は機を窺ひつゝ、ひたすら謹慎の意を表してゐたので、文祿年中には京都に未だ一寺の復興も見なかつた。文祿二年、小西行長の老父が京都に没する時、師オルガンチーノに遺言して、京都南蠻寺の新建の爲に多額の金員を喜捨したとは報せられたが、實行に着手するやうな無謀な舉には出でなかつた。オルガンは京都に居宅一軒を借り、密に禮拜堂を設けてゐたが、それも公然居住の許可を得たのは彼と日本語通の

ロドリゲスとの二人のみで、其外二人の師父には其沙汰はなかつたのである。そんなに穩和に控へてゐた折も折、別派のフランシスカン連は傍若無人なので、オルガンは同じく耶蘇會派であるが

西班牙人であるモレイジョンといふ者を使者として先方に交渉させたが、彼等は中々説教をも止めない、これは慶長元年のことであるが、前年には前田玄以から令を下してフランシスカンの寺院の門戸を閉鎖させ、本年は玄以から重ねて説教を止めるやうに諭示したが、頑固で聽入れない。遂に秀吉の怒を招き、同年末京阪のフランシスカン派の師徒を刑すべきことが令せられ彼等は遂に京都の或地に於て耳を截られて長崎に回されて殺された。このフランシスカン派即ちフラテ派の來朝のことは、興廢記にも載せられ、殊に吉利支丹物語には、その所刑のことも及んでゐる。興廢記等に見ゆる天正年中の南蠻寺の破壊の條には、多少

このフラテ派捕縛西下等に關する史實の分子が混入してゐるやうである。かくてフラテ派所刑の翌年慶長三年秀吉は他界し、家康の時代となつた。

五

秀吉にも家康にも氣受けの好かつた師父ロドリゲスは絶えず布教建寺の免許を得んと畫策中であつたが、慶長四五年來段々機運が向いて來た。關ヶ原役の後、實權家康の手に歸するや、京阪に先づ師父の居宅建設が許可され、同九年（一六〇四年）に至つて漸く京都に敎會堂の再建が許された。それは天正十六年の南蠻寺の破壊から十七年目になるのである。

所司代板倉勝重は耶蘇敎を保護する政策を取り洛中建寺の爲に資を與へたと云ふことが、西敎史に見えてゐるが、全然虚構でもあるまい。從來の寺は下京に建てられたのであつたが、今度は上京

に地を相し貴人の邸宅に接する邊に建立することになつたとて、宣教師は非常にその成功を特筆してゐる。この時分はオルガンチーノは既に京都を去つてしまひ、(その京畿在住は前後三十餘年に亘る) モレージョンといふ師父が長老であつた。

この新南蠻寺の位置は吉利支丹物語 寛永十六年編 に一

條油小路に大寺を建てたのであるのを始め、耶蘇征伐記に彼の寺の跡をデイスウスの町と云ひ、一條の上^{卷八}に在ると註してあるにも符合する。雍州府志 古蹟 に徒斯辻子(大宇須辻子)といふのが一條北油小路と堀河との間に在る由を記載してゐるにも合ふ。寛永年間出版された最古の洛中圖を始め、慶安五年 承應元年 寛文年代、元祿享保時代の地圖にも「だいうすのづし」又は「大うす丁」となつてゐるのは右の史籍地誌の所載に合致する。後世にも町名は残り、地圖にもその名失せず、文政年間、太田錦城が在洛中にも之を見聞して一條戻橋の東北の地

を南蠻寺の遺址となし、「今は攝家方の屋敷となりて片側町なり」と記してあるのでも、その傳説の永く亡びなかつたことを徴するに足る。この事は彼れの悟窓漫筆拾遺に出てゐるのであるが、著者が右の南蠻寺を信長時代建立のものと思へたのは誤謬である。

この寺の位置については疑ふべき所がないではない。慶長十九年の禁教嚴令耶蘇寺破壊があつた時には、右の位置の寺は最早存じなかつた様に見える。この事は尙後段に述べることとする。

ともかく耶蘇會士が上京に南蠻寺を建てた慶長九年頃より以後の凡十年間は京都の耶蘇の再興して隆盛になつた時代である。不干ハピアンが妙貞問答書を著はして神儒佛を排して大に耶蘇を勸説したのは、慶長十年である。その翌年には林道春が弟信澄及松永貞徳 貞 を伴うて不干のもとに至り妙貞問答書を一見して痛く耶蘇を排したことがあ

つて、羅山文集卷五十六に其趣を詳記してゐる。道

春は既に慶長九年、利瑪竇が其前年萬曆三十一年著

はした天主實義を讀んで斯致を研究してゐたので

あつた。道春等と不干との應對も、予の推測にて

はやはりこの新南蠻寺に於て行はれたものと思は

れる。

同じ慶長十一年頃より凡七年間師父スピノー

ラ Spinora が滯京し、京都にアカデミヤを設置し

上流の人々の參加を得たともいはれる。スピノー

ラは自身も特に算術に達した相當の學者で、或者

は彼を支那に於ける利瑪竇にも比して居る。利氏

の如き興學事業は遂げなかつたが、西洋文物渡來

史の上には注意しておかねばならぬ事である。モ

レージョン及其後任のマツトス Matos が京都の學

林長の肩書を以て史上に顯はれ、慶長十八年英國

の船長セーリス Sails が關東よりの歸途京都に立

に徴すると、天正中期の南蠻寺に對して慶長時代の
新南蠻寺は學林をも備へその繁榮優るとも劣ら
ぬ有様であつたことが想像されるのである。

六

この新南蠻寺は其後廢絶したのか、それとも北
野邊にでも移つたのか、確でないが、慶長十九年
正月十八日大久保相模守が京都の耶寺燒毀信徒處
刑に着手した頃には元の位置には立つてゐなかつ
た。クラツセに由れば、その時耶蘇會師父の一會
堂リスンヤベルと禮拜堂二字と彼等の一居宅メイソンとを破壊させたど
あるが、バジエーには、會堂レクリスを複数に記してある。
當代記には「伴天連師匠寺有、二ヶ所、右之内西京
寺は被燒拂、四條町中に有之寺は厭類火、コボチ
テ被火付、師匠兩人は無構家財西國へ退」とあつ
て二ヶ寺を算へてある。西の京の寺とは、或は前
記一條の南蠻寺の後かとも思はれる。それは時慶

郷記に「ダイウス門徒被拂晚ニ北野邊在之寺ヲ被燒捨」と見ゆるのと同じであらう。昨年西の京最寄の延命寺、北野邊の成願寺から吉利支丹の墓が發見せられ、それが皆慶長中期の年代のものである事柄と参照すると、右の記録に見ゆる一寺の位置は略推定し得るわけである。本光國師日記にも「寺々」と記してあるから、バジエーの志に複數になつてゐるのに符合するが、クラッセの記事と参照すると、一は教會堂で其他は禮拜堂で、これらを一括して複數に記るしたと解しておいて差支ない。さすれば上京の方には南蠻寺で、四條の方

は或は禮拜堂ソキベムルかも知れぬ。

南蠻寺興廢記に信長秀吉の時代の寺院を四條坊門としてあるから、その遺址に家康時代に新寺を再建したと考へられぬのでもない。慶長末期の四條町中の寺とある其位置を、必ずしも四條坊門とある舊寺のそれと一致させないでもよいが、興廢

記の記事は當代記等の記録所載の記事を標準として改修して考へて見る餘地はあると思ふ。吉利支丹物語には五條堀川に大寺を建てたとあり、寛永年代新舊兩版の地圖には四條堀川(西)に「大うす丁」の町名が残り、それが慶安五年(承應元年)版の圖までは存じてゐる。その後出版の分には「たかす丁」又は「佐竹町」となつてゐる。地圖の四條堀川と物語の五條堀川とは、多分同じものであらう。四條坊門とあるのも更に引下げて見ると、これらと一致するかも知れない。

寛文五年出版の京雀卷二に釜座附拔通の高辻下の所に「だいうす町」を標し、秀吉が破壊した南蠻寺の舊址である様に書いてある。卷六、五條松原通新町西へ入る所にある藪の下町より北へ上る町を「だいうす町」と呼び、秀吉時代には耶徒が住んでゐたのを破壊したものとある。これは卷二所記の高辻下るの壱町イチの分と同じであることは勿論で

あるが、これに由れば、舊南蠻寺の遺址は寧ろ此處に置かねばならぬかもしれぬ。寛文版の古圖にはこの町は「さくや町」となつてしまつてゐるが、天和以後元祿享保時代又は後世の地圖にも「だいす町」の名は永く保存されてゐる。

之を要するに興廢記の四條坊門と當代記の四條町中と吉利支丹物語の五條堀川との三ヶ所の分と京雀の高辻松原間(五條坊門)と寛永以後の地圖に於ける同所及四條堀川の分との關係は今日の所決定しかねるので、如上の如く色々の見方を提出しておいた次第である。四條坊門を五條坊門と訂正して、之を京雀及古地圖の所載の高辻下る町の分と一致させて、信長及秀吉時代の舊南蠻寺址と假定し、五條堀川を四條堀川と訂正し、四條町中とある分と一致させ家康時代の小寺又は禮拜堂と假想して、之を上京又は西京の同代の新南蠻寺と對

立せしめておいては如何かとも思ふ。従て新舊南蠻寺の遺址に當る町の名が永く残り、其他の一寺又は一堂は早く忘れられてしまふやうになつたかもしれぬ。さりとて町名の殘存年代の如何によつて其由來を定める一理由とするのは薄弱であるが、以上のアイデンチフィケーションを假定してかゝると、かうも合せ考へられまいかと附加へたまでいある。

挿・畫・說・明

茲に挿入せる寫眞版卷繪螺鈿入盒子は所藏者名古屋市堀江清足氏が今春同地に於て得たる所にして、未だその傳來を知る能はず。雖も、慶長時代の吉利支丹寺院所用のものと推定せらる。外法直徑三寸八分、全高二寸八分五厘。蓋の面には主に耶穌會に用ゐらるゝ、三分の文字あり、上に十字標あり下に釘さしたる心臓の象徴あり、周圍には後光あり、京都南蠻寺遺鐘の表面に鑄出せる所と全く異なる所なし。これらの標象は螺鈿を嵌入してあらはせり。卷繪は粗製にして何等美術的價值なし。雖も、宗旨の器具としては本邦初見の珍品なり。案するにこの器は破

提字子にも「提字子の寺にも朝夕の勤行あつて朝の勤をば、ミイ
サミ云て經を讀む、又チスチヤミて小夢の粉にて、兩鬢煎餅の如
くなるものに要文を唱ふればセズキリシトの眞肉となる云、

マ葡萄の酒を銀盞につぎ同く文を唱ふればセズキリシトの眞血
となる云て彼煎餅を食ひ而て右の酒を呑む」にあるが如く、
兩鬢煎餅即ち *two sides* を藏め置く所の小箱に外ならざるべし(新
村)

叢説

敷^{シキ}の語義並に榊に就て

農學士 清水元太郎

本邦の古代に於て城をキと稱せしは從來國學者
が一般に認容せる所にして特に説明を要せざるが
如し。冠辭考、百敷乃の條に、古事記^{雄略}毛々志
紀能遊富美伎比盆波、萬葉一、百磯城之大宮所云
々こは皇大城の堅きを石にたとへて百の石城^{イシキ}の宮
と云ふ也、萬葉には借字の多かれど右の百磯城は
正しく書きし物也、崇神紀に磯堅城神籠^{シキノミツガキ}と有ルに、

意も字さへ同じかれば也、石を志とのみ云は、穴
石明石磯城の類なり、城を紀といふは古き語にて
多ければ更にも云はず(畧)と記し、記傳^{十九}神武製^御
歌の一句、宇陀能多加紀爾の條に、多加紀爾は契
冲高城になりと云へる然なり、紀とは必ずしも後
世の城の如くした、かならねども、かりそめに垣
結び廻らし構へたる所なごも云なり、高津宮段歌